

Ramazanoglu, Caroline and Janet Holland, 2002, "Escape from Epistemology? The Impact of Postmodern Thought on Feminist Methodology", *Feminist Methodology: Challenges and Choices*, SAGE Publications, 41-82.

キャロライン・ラマザノグル, ジャネット・ホラント, 2002, 「フェミニストは真実を語る
ことができるか——科学的手法に対する挑戦」

※ () の数字はページ数を表す。

レジュメ作成者による紹介文

本稿は、フェミニスト方法論の理論および実践を体系的に整理した *Feminist Methodology: Challenges and Choices* に収録されている。本稿では、真実 truth と客観性 objectivity という概念に対して、フェミニストたちがいかなる方法論的態度をとってきたのかが説明される。

1. 導入 (41-42)

- フェミニストたちの主張は、非科学的、主観的、政治的、そして真実ではないものとして異議を申し立てられる可能性を有している。
 - ・ はたしてフェミニストは真実を語るのだろうか。本章では、真実 truth と客観性 objectivity という概念が、フェミニストの知に投げかける挑戦について考察する。

2. 社会的現実に関する有効な知の探求としてのフェミニスト研究 (42-44)

- フェミニズム研究の重要性の1つは、例えば、研究者が「家庭内暴力」や「女性の従属」を現実のものとして主張できることである。
 - ・ すなわちこのような主張が、主観的で不合理なもの、あるいは政治的偏見の産物として退けられることなく、「家庭内暴力」や「女性の従属」が実在し、かつそれらが正当化されないと主張できることが重要である。
 - ・ そのさいフェミニストは、「家庭内暴力」や「女性の従属」がなぜ存在するのか、さらにそれらがどのような社会的意味を有し、他の社会的要因とどのように相互作用するのかについて正確に伝える政治的責任がある。
- フェミニスト研究者や活動家が女性の声や女性の体験に注目することを通して蓄積してきた家庭内暴力に関する知識は、女性への暴力に対する認識に劇的な変化をもたらした。しかし、人々の体験は常に解釈され、言語で表現され、意味を与えられているため、アイデア（暴力に対する概念）と現実（実際に起きていること）を中立的に結びつけて、たった1つの確かな真実を生み出すことはできない。アイデアと現実の相互関係は複雑であるため、人々の体験はさまざまに解釈されうる。

3. 科学的方法に対するフェミニストの反論 (44-47)

- 1970年代以降、フェミニストたちは、科学的方法論における男性中心主義的な傾向を批判してきた。
 - フェミニストたちが特にターゲットとしてきたのは、実証主義の適用であった。実証主義の方法論においては、研究者が正しい方法を用いれば、現実に直接アクセスすることができることとされた。さらにそこで産出される知識は、研究者の価値観に影響されないものとして捉えられた。
 - フェミニストたちは、知識が研究者の価値観から自由でありうるという主張に疑義を呈してきた。
- もしフェミニスト研究者が、既存の家父長制的あるいは男性中心主義的な知識よりも「真実」に近い知識を生み出したいと望むなら、自らが生み出す知識がより説得的であることを提示する必要がある。
 - すべてのフェミニスト研究者は、ジェンダー化された社会生活に関する知見を生み出し、それを正当化する上での問題に直面している。

4. 客観性、主観性、マルクス主義、相対主義：真理への競い合い (47-57)

- フェミニストを含む研究者たちは、自らの知識を正当化するさい、以下の4つの立場を採用しうる。

① 客観性は主観性から切り離され、かつ主観性よりも客観性が優位である

- この立場では、客観的な知識を生み出すために主観性をコントロールすることが必要であり、そのために人間の理性 reason は用いられる。そのさい、客観性と主観性は分離可能であり、理性は中立であるとみなされる。「事実」は、研究者の「価値観」とは無関係に獲得することができ、注意深い研究者は「公平」であるという信念は、客観性が達成可能であるという前提に基づいている。
 - たとえば①の立場をとる Hammersley and Gomm (1997)は、「偏りのない研究」を価値のある研究として捉える。そしてフェミニストによる研究を、あからさまな政治的動機を伴う「解放的研究」の一形態とみなし、そのような研究者の態度は研究にバイアスを持ち込むと主張する。彼らによるとフェミニスト研究は、真実を探求しているのではなく、政治的目標を独断的に追求するものである。以上を踏まえると、フェミニストにとって①の立場は整合的ではない。

② 主観性は客観性から切り離され、かつ客観性よりも主観性が優位である

- 1970年代には、主観性と客観性を相互に排他的であるとするデカルト的二元論の前提を受け入れ、主観性と客観性の関係を逆転させたラディカル・フェミニストが登場する。

彼女たちは「客観性」と「合理性」が表現しているのは中立性ではなく、男性の利益であると主張し、主観的あるいは「女性的」な知識を、価値のあるものとして捉えた (Daly 1978)。

- ・ この立場を支持するラディカル・フェミニストのなかには、女性の主体性と身体との密接な関係 (月経、出産、授乳など) が、女性に女性的な思考力 (女性特有の知識の源) を与えるという考え方を提示するものもいた。この考え方は、他の立場のフェミニストによって本質主義的なものとして批判されている。

③ 主観性と客観性は分離不可能である

- ・ 客観性と主観性の分離可能性を主張するフェミニストは、マルクス主義の方法論に依拠している。マルクス主義の目的は、客観的であることよりも、むしろ真実を発見することである。
 - ・ Karl Marx (1976) は、資本主義システムの「真実」について、既存の政治経済学者よりも「優れた」知識を生み出すことができると主張した。それは、彼が客観的であったからではなく、資本主義的生産システムの性質について「より良い物語」を語ったからである。彼は、労働者の生活の観察、労働者の搾取に関する理論、資本主義における利潤追求の必要性の間の関係性を概念化することに成功した。
- ・ 政治的コミットメントが社会調査のプロセスと切り離せないものであるという考え方は、フェミニストの方法論の中心をなす。この見解では、すべての研究者は政治に関与し、個人的な偏見や経験を持っており、特定の文化、場所、言語のなかに位置するものとされる。

④ 相対主義

- ・ 相対主義の立場においては、知識、経験、実際の社会的現実の間に直接的な関係を確立できるような一般的なルールや基準が存在しない。この立場からは、外部の社会的世界に関する有効な知識は、直接的にも間接的にもアクセスできない。真実に対する競合する主張は常に存在するが、それらの正当性を判断するルールは存在しない (Woolgar 1988)。
 - ・ 社会調査において、絶対的な相対主義というのは問題のある立場であり、完全に採用されることはほとんどない。相対主義者は「真理」の多重性を受け入れるが、自らの知識の真理を主張するにつれて、その立場はますます矛盾することになる。
- ・ 相対主義は、知識と現実を結びつける試みを放棄することで、フェミニスト研究者に方法論的困難から抜け出す道を提供するよう見えるかもしれない。
 - ・ しかし相対主義をとるフェミニストは複数の真理を認める立場に立つため、自ら

の知識の正当性を主張することはできない。相対主義の観点からすれば、「家庭内暴力」は、他の知識（例えば、「被害者」は無意識のうちに自分自身に暴力をもたらすとか、問題の事件は「暴力」でないといった知識）と競合する「現実」の1つのバージョンに過ぎない。相対主義を支持するフェミニストは、知識の正当性を判断するための普遍的な規則を失い、したがって、何が真実であり何が誤りかを区別するための手段も失うことになる。

5. 結論 (57-58)

- フェミニストは、知識がその生産条件に左右されるという相対主義的な議論を受け入れることができるかもしれないが、だからといって、自分たちの好きなように現実の物語を語ることを正当化することはできない。フェミニストが語るジェンダーの物語は、人々の経験の多様性を意味するものでなければならない。フェミニストたちが自らの知識を「真実」として提示するとき、常にその知識の正当性の検証に関する問題に直面している。